

君と出逢って 2

J u n n a & T a k a n e

井上美珠

Miju Inoue

termity



エタニティ文庫

Contents

君と出逢って2	5
書き下ろし番外編 ずっと傍にいて	299

君と出逢って2

プロローグ

——高橋改め、新生純奈。

結婚して間もない、新婚である。

旦那様の名前は新生貴嶺。親戚で、ハトコで、七つ年上の三十四歳。日本の最高学府を卒業し、七ヶ国語を流暢に話す外務省勤務のキャリア外交官だ。

おまけに、モデル並みにスタイルが良く、ブランドものの眼鏡が似合うクールなイケメン。

そんなハイスベックな人と、会社を退職して家事手伝いをしていた純奈が、まさか結婚することになるとは夢にも思っていなかった。

彼とは本当に結婚決めて大丈夫？　とわれそうなくらい、出会ってから結婚まで速かった。言うなれば、お付き合い期間ゼロのスピード婚。

四度目に会った時に結婚前提のお付き合いを申し込まれ、その一週間後にはプロポーズされた。さらに、プロポーズ直後に旦那様のドイツ赴任が決まり、あれよあれよと入

籍、ドイツ行きまで話が進展してしまったのだ。

普通だったら、えーっと思うような状況でも、なぜか純奈は大丈夫だった。大丈夫というか、なんか妙に納得してしまい、純奈のほうから彼について行くことを選んだ。

本当は一生結婚するつもりなんてなかった。けれど純奈は、どんなにスピード婚でも、突然慣れないドイツで生活することになっても、旦那様と結婚したいと思ったのである。

——旦那様のことが好きだから。

1

一緒に暮らし始めて、約一ヶ月。つまり、純奈がドイツに来てからそれくらいの時間が経った。

まだまだ慣れないことばかりだが、最近やつとドイツ式の洗濯のやり方やお買い物にも慣れてきたところだ。最初は、洗濯機の使い方一つわからなかった。

全てがドイツ語表記なのはしょうがないとはいえ、家事を一から旦那様に教えてもらわないといけない専業主婦というのは、いかなものだろう。

純奈は、一日も早くこの暮らしに順応しようと、日々頑張っていた。

そんなある日の週末。

珍しく土日の休みが取れた貴嶺と、出かけることになった。相変わらず仕事の忙しい彼は、先週はまったく休みがなく、一緒に住んでいてもほとんど顔を合わせる事がなかったくらいだ。

久しぶりに貴嶺とゆっくりできることに、純奈の表情も自然と緩んでくる。

行き先は、ドイツに住んでいる、貴嶺の知り合いの家だった。その知り合いは、彼にドイツ語を教えてくれた人なのだという。ドイツに赴任してから連絡を取り合っていたらしく、今度の休みに会う約束をしたそうだ。

「行きましようか」

自然に手を差し伸べられ、純奈は戸惑う。だって、男の人と手を繋いだ経験なんてほとんどない。

「純奈さん？」

不思議そうに名前を呼ばれた。こちらに差し出された貴嶺の手が、閉じて開いてを二回繰り返す。

純奈がおずおずと手を伸ばすと、その手を引つ張られるようにして繋がれた。

「手を繋ぐのは、緊張しますか？」

聞かれて、コクコクと頷く。すると貴嶺は、繋いだ手を持ち上げ、純奈の手の甲にキ

スをした。

そんなことをされれば、当然、顔が熱くなる。きつと貴嶺にも、赤くなった頬が見えていることだろう。

「これ以上のことを、しているのに？」

そう言って口元だけに笑みを浮かべる旦那様は、やっぱりとても大人だ。普段ストイックなほど淡々としている貴嶺のそうしたところに、純奈はいつも翻弄ほんろうされてしまう。

二十七年間も女をサボってきた純奈は、恋愛もしてこなかったの初心者。この年になるまで男の人と付き合ったこともなければ、恋愛もしてこなかった。だから当然、手を繋ぐことも、それ以上も経験してこなかったわけで。つまり、純奈は貴嶺が全て初めてだったのだ。

こんな些細ささいなことにも、いちいち動揺してしまふ自分が恥ずかしい。

「い、いけませんか？」

思わず強く言うと、貴嶺は首を振った。

「いえ」

「貴嶺さんが、全部初めてなんです。お、大人な感じで、突っ込まないでください」横を向いて言うと、繋いでいた手を離されて、腰を抱き寄せられる。途端に純奈の心臓が音を立てて反応した。

「そうでしたね」

なんとも冷静で、端的で、低い声。旦那様はあまり表情が変わらず、言葉も少ない。でも、眼鏡の奥の、切れ長で大きな目に浮かぶ感情は、言葉よりもずっと饒舌な気がした。

「慣れてほしいです、奥さん」

奥さん、と呼ばれる響きだつて、貴嶺が言うと、なんだかもう、堪らない感じで。

「そ、そのうち」

顔を赤くして答えると、貴嶺の手が腰から離れ、再び純奈の手を握ってきた。

「わかりました。行きましよう。遅れてしまいます」

「はい」

手を取られたまま、二人で住む官舎の部屋を出た。

これから向かう貴嶺の知人の家は、ここから電車で三、四十分ほどの場所にあるという。駅まで行けば、車で迎えに来てくれるそうだ。

今日、初めてその人と会う純奈は、持っていく手土産に迷った末、無難に菓子折りを用意した。

「それ、俺が持ちます」

こんなところも、旦那様は凄く優しい。外国に行くことが多いからか、女性に対して紳士的だ。

容姿も良ければ性格も良くて、少し言葉が端的で口下手なところもあるけれど、本当に純奈にはもったいないくらいの人。

「ありがとうございます」

やっぱり、この人が好きだな、と再認識する純奈だった。

☆ ★ ☆

目的地に着き貴嶺の後について改札を出ると、すぐに貴嶺が手を挙げた。

彼は笑顔で手を振る相手に近づき、互いにハグをした。

口の周りに白い髭を生やしたやや恰幅のいいオジサマだ。二人は親しげに何か話しているが、残念ながら純奈はドイツ語がまだわからない。でも、貴嶺から手を差し伸べられたので、彼の隣に寄り添う。

「○※□純奈△～Frau」

かろうじて聞き取れたのは、純奈とFrauという言葉だけ。Frauは妻という意味なので、きつと相手に自分を紹介してくれたのだろう。

にこやかに手を差し出された純奈は、笑顔でその手を握る。親しい間柄なら、そのまま頬にキスをするみたいだが、初対面の純奈は握手だけにしておいた。

「おくさんかわいいねえ」

日本語で言われて、瞬きを^{まばた}する。

「ブルーノは、少し日本語が話せるんです」

「ブルーノさん？」

「ええ。俺のドイツ語は、彼から習いました。……自宅で昼食を用意しているそうです。行きましようか」

純奈はコクコク頷いた。歩きながら、楽しそうに話す二人を見上げる。時々、貴嶺が通訳をしてくれるけど、こういう時、言葉がわからないと不便だなと思う。

ここに来てから、純奈は貴嶺にドイツ語教室を手配してもらった。けれど、まだちよつとしか通えていない。純奈はせめて日常会話がわかるくらいにはなろうと決意した。

ブルーノの運転する車に乗ってしばらく行くと、雰囲気のある石畳の道に出る。そこでブルーノは車を止め、三人は車を降りた。彼の後について歩きながら、石畳とちよつとした坂道のある素敵な景色に目を奪われる。思わず純奈は、携帯電話を取り出して写真を撮った。

「いいところですね」

純奈が言うのと、貴嶺が頷く。

「ええ。もっと早く来ればよかったです。十年以上、手紙だけのやり取りでしたから」

「十年も手紙のやりとりをするなんて、ブルーノさんとはずいぶん親しいんですね。どんな方なんですか？」

「ブルーノは、この間までベルリンの音楽大学で講師をしていたんですよ」

音楽大学？ 思わぬ答えに目を丸くしてしまう。

「目が落ちそう」

口元に笑みを浮かべて、貴嶺が立ち止まる。どうやら、ブルーノの家に着いたようだった。

貴嶺に続いて家の中に入ると、出迎えてくれたオバサマが貴嶺に抱きついて、両方の頬にキスをした。たぶんブルーノの奥さんだろう。ここは外国だから、こうした挨拶は当たり前なのだ。そうは思っても、その熱烈な歓迎ぶりに、純奈は圧倒されてしまう。

オバサマへキスを返した貴嶺が、先ほどと同じように純奈を妻だと紹介してくれた。

次の瞬間、オバサマに抱き付かれて、頬にキスをされる。何か話しかけられているが、純奈にはわからない。でも、歓迎してくれているのはわかった。

「彼女はブルーノの奥さんでアグネス。純奈さんに会いたかったそうです。俺が事前にあなたのことを話していたので」

「そうなんです。私も会えて嬉しいですよ」

純奈は、アグネスに笑みを向けた。

そのまま純奈達は、食卓へ案内される。テーブルの上には、ジャーマンポテトやソーセージ、グラタンなど、美味しそうな料理が並べられている。

いつもなら、ご飯二膳をペロリと食べる純奈だが、さすがにここは貴嶺の知人宅だ。ほどほどにしようと気を付ける。でも、目の前の料理はどれも美味しくて、ついパクパク食べてしまうと、隣で貴嶺が笑った。

「よく食べるあなたを、アグネスが可愛いと言っています」

純奈はちよつと赤くなる。思ったより食べ過ぎていた自分を反省し、少しペースを落とした。

料理がほぼなくなつた頃、ブルーノと話す貴嶺がだんだん困つた顔になっていく。不思議に思つて首を傾げると、貴嶺は純奈の方をちらつと見た。

すると、ブルーノが笑いながら席を立ち、手で向こうに行くよう促してくる。

「どうしたんですか？」

渋い顔をしている貴嶺を見上げると、彼はため息をついて立ち上がった。

「ああ……とりあえず、純奈さんも一緒に来てください」

貴嶺について行くと、ブルーノが一つの部屋のドアを開けて待っている。その部屋の中央にあったのは、綺麗なグラランドピアノ。

「わ……凄い」

「ベヒシュタインか……」

「え？ ベひしゅゆ？」

「ベヒシュタイン。有名なピアノのメーカーです。これはきつと、コンサート用でしょうね」

貴嶺はピアノの傍に近づいて行き、ブルーノに断つてピアノの蓋を開けた。

何を話しているかわからないが、無表情な中に、なんだか嬉しそうな雰囲気を感じる。そうしているうちに、貴嶺がピアノの前に座った。それを見て、純奈は驚きに目を丸くする。

貴嶺は、慣れた仕事で一度鍵盤に指を走らせると、静かに演奏を始めた。

流れてきたのは、純奈も知っている『愛の挨拶』という曲。よく電話の保留音になっているので、何度も聴いたことがある。だが、こうしてピアノで聴くと、とても綺麗な曲だった。

っていうか……

「貴嶺さん、ピアノ、弾けるんだ……」

純奈は、貴嶺のピアノを弾く姿を見ながら、呆然とつぶやいた。
優雅に動く指を見ていると、凄いなあ、と素直に感心する。

頭が良くて、語学も堪能で、さらにピアノまで弾けるイケメンの旦那様。本当にどれ

だけハイスベックなんだろうと思う。

出会って間もないから、まだまだ知らないことばかり。だから、新しい発見があるたびに、純奈は素敵な旦那様にドキドキしてしまう。

そして、もっと新生貴嶺という人を知りたい、と思うのだった。

☆ ★ ☆

午後四時頃。貴嶺と純奈はブルーノの家を出る。ブルーノは帰りも駅まで送ってくれて、またぜひ遊びに来てほしいと二人をハグしてくれた。

四十分くらい電車に乗り、最寄り駅に降り立つ。

「貴嶺さん、晚ご飯どうしましょう？ 何か食べたいものあります？」

「昼に食べすぎたので、軽いものがいいです。サラダとか」

あれで食べすぎた!? と純奈は心の中で突っ込む。

これまで一緒にいて思ったのは、貴嶺はあまりたくさん食べないということ。むしろ純奈の方が食べる量が多いのではないかと思う。

「サ、サラダですか……了解です」

「純奈さんは、食べ足りないでしょう？」

貴嶺が口元に笑みを浮かべて聞いてきたので、純奈は赤くなって頷く。

「私、貴嶺さんよりめっちゃ食べてますよね？ 大食い……」

貴嶺は、運動するし、食べ過ぎることもない。食べたい放題の純奈とは大違い。すると貴嶺が、首を傾げた。

「大食い……ですか？」

「よく食べる自覚はあるんです。ご飯美味しくて、つい、たくさん食べちゃって」

純奈の言葉に、貴嶺は思わずと言った感じに笑った。

「食べない人より食べる人がいいと、俺、前に言いませんでした？」

「そうでしたっけ？」

淡々と言い返されて、内心タジタジになってしまう。

「確実に言いました。俺は、いっぱい食べるあなたが好きですよ、純奈さん」

口元に笑みを浮かべて貴嶺が言う。彼の、純奈を見る目が凄く優しい。

サラダと好きだと言われて、そんなことにも胸がドキドキする。

「サラダ以外に、何を作るつもりですか？」

「あ、そうですね……白身魚があるので、それをバターソテーして、あとはスープとパン、とか？」

家にある材料を思い出しながらメニューを考える。すると、タクシー乗り場で立ち止

まった貴嶺が、顔を覗き込んだ。

「じゃあ、俺もそれを食べます」

「え、お腹いっぱいなんでしょう？ いいですよ、無理しなくても。貴嶺さん太っちゃいますよ？」

優しい人だから、気を遣ってくれたのかもしれない。そう思って純奈が言うと、旦那様が微笑んだ。

「その分、消費すればいいんです」

「消費？」

「はい」

「食後にジョギングでもするんですか？」

純奈が首を傾げながら見上げると、貴嶺は口元に拳を当て、笑いを堪える仕事をした。そして、困ったように頷く。

「どうかかな」

なんだか、はっきりしない返事だけれど、まあいいか。

ほどなくして、やって来たタクシーに乗り込み、二人は官舎へと帰った。

☆ ★ ☆

貴嶺は、純奈の作った晩ご飯を軽く食べた。本当に軽く。それでも、彼は多少無理をしていたように思える。だって、食後にお腹をさすっていたから。

やっぱり、よく食べる純奈に気を遣ってくれたのだと申し訳ない気持ちになった。

貴嶺は、本当に自分にはもったいないくらい旦那様だ。

食後、先にシャワーを浴びた貴嶺は、リビングのソファでテレビを見ていたが、午後九時を過ぎたところで寝室へ行ってしまった。疲れているのかな、と思いながら純奈もシャワーを浴びて、寝室へ行く。

もう寝ていると思っていたが、貴嶺はベッドの上で本を読んでいた。

クイーンサイズの大きなベッドに上がり、貴嶺の隣に座る。そうして、純奈はずっと気になっていたことを問いかけた。

「ピアノ、弾けたんですね」

「ああ、はい」

貴嶺らしい淡々とした答えが返ってきた。

純奈は旦那様のことをあまり知らない。スピード婚だったし、貴嶺の仕事が忙しくて、

出会ってからはほとんど一緒にいなかった。でも、こうして少しずつ知っていくのは、ドキドキするし、嬉しい。

「ブルーノさんに教えてもらったんですか？」

「ええ。俺は十八歳までブルーノにピアノを教えてもらっていました」

「……………え？ ドイツ語の先生じゃなかったんですか？」

「ドイツ語は、彼とコミュニケーションをとるため、必要に駆られて覚えたんです」

そうやってスルツと覚えられるところが凄いと思う。純奈はこちらに来てからドイツ語を教えてもらっているけれど、いまだにチンプンカンプンだ。

「私、貴嶺さんについて、知らないことばかりですね」

「はい？」

「何ヶ国語も話せるし、ピアノまで弾けるなんて……貴嶺さんは、本当に凄いです」

純奈は俯いて、ベッドの上で体育座りする。

貴嶺の凄さを知るたびに、自分の至らなさを思い知らされて落ち込んでしまう。

今日だって、せっかく連れて行ってもらったのに、純奈は通訳してもらえばかりで自分から話しかけることすらできなかった。

膝に頬を乗せて、ついため息を零してしまふ。

「あまり、そう言われるの、好きじゃないです」

「……………ですよ。すみません」

さらに自己嫌悪。もう、本当にダメだなあ、と思った。

「でも、好きな人の前では格好つきたいので、良かったと思うことにします」

そう言って本を閉じた貴嶺は、ベッドを降りて部屋の電気を消した。急に部屋が真っ暗になり、純奈はサイドチェストに置いてあるタッチライトをつける。

「純奈さんは、そういう俺はダメですか？」

貴嶺がベッドに上がりながらそう言う。目が合うと、純奈は思わず逸らしてしまった。

「そういうわけじゃ、ないですけど……」

「俺にとっては、あなたの方こそ、でき過ぎた奥さんです」

「え!? 私のどこが……」

驚いて貴嶺を見ると、彼は口元に笑みを浮かべていた。

「出会って間もないのに、こんな口下手で至らない俺と結婚して、ドイツまで来てくれましたから。普通はついて来ないでしょう。あなたの言う通りの男だったとしても」

ベッドに横になった貴嶺が、枕に片肘をつけて純奈を見上げてくる。

「なぜ、結婚してくれました？ なぜ、言葉も通じない外国に、一緒に来てくれたんですか？」

「そ、それを言うなら、こっちだって同じことを思ってますよ！ 出会ってすぐに、プ

ロボーズされるし」

純奈も布団の中に潜り込んで、枕に頭を乗せた。

「俺は、最初から言ってます。好きだからですよ、あなたが」

「……そりゃ、言われましたけど……でも、特別美人でもないし、恋愛経験もない、目ダヌキな私をどうしてって思うんですよ」

「純奈さんは、俺のこと、どう思ってるんです？」

どう思ってるって、言われても……

「……す、好きです」

急に顔が熱くなってきた。何を改めて告白しているんだ、と熱を持つ自分の頬を撫でた。

「お互い、生きてきたフィールドは違うし、できることも違う。でも、好きだから結婚して、ドイツで一緒に生活している。それじゃ、いけませんか？」

なんだかすつきりまとめられた気もするけど、確かにそうかもしれない。そう思いながら、純奈は布団を引き寄せた。

「そう、ですね」

純奈の答えに、フツと笑った貴嶺が眼鏡を外す。そして、ベッドへ横になりながら、純奈に手を伸ばしてきた。気付けば純奈は彼の広い胸にすっぽりと抱き込まれる。

貴嶺の体温を身体中で感じると、急に心臓が落ち着かなくなった。

「た、貴嶺さんっ?」

「可愛い、純奈」

至近距離で見つめられ、一瞬息が止まった。は、と浅く息を吐く。

「ああ、また、可愛くなった」

そう言っつて、頬にキスされた。それからうなじにもキス。

普段無口な旦那様の甘い仕草に、純奈の身体が柔らかく解けていくのはすぐのことだった。

全裸にされ首筋にキスをされた。その唇が首筋を這い顎の下にもキスされる。そのまま貴嶺の唇が純奈の唇に重なり、唇を啄みながら舌で唇を開く。貴嶺の舌が中に入り込み、純奈の舌を絡めとって、強く吸われた。自然と首がのけ反る。

「……っん」

音を立てて唇が離れると、綺麗な目がじつと純奈を見つめてきて、顔が赤くなった。

貴嶺の指が耳の後ろを撫でて、次いでうなじを撫で上げられる。くすぐったくて首を反らすと、大きな手が首の後ろを包み込む。

「反応が、可愛いです」

微かに笑った貴嶺が再び唇を重ね、今度は最初から深く口付けられた。

貴嶺のシャツを強く掴んで、そのキスに応える。
その間も、首筋や耳の後ろを撫でられて、ずらした唇の隙間から鼻にかかった声が漏れてしまう。

舌を締めながら、何度も唇を吸われたり甘く噛まれたりする。最後に少し引っ張るみたいにして唇が離されると、純奈は喘ぐように息をした。

「唇が赤い」

貴嶺の親指が純奈の濡れた唇をなぞる。

「貴嶺さんが、キスをやめてくれないから」

貴嶺が微笑かに笑って言う。

「そうですね」

そして、首筋から胸の谷間に手を滑らせた。何度も、胸の谷間を下から上へと撫でるのに、決定的な触れ方をしてこない貴嶺に、純奈の息が上がっていく。

「触らない、ですか？」

「どこを？」

口元に笑みを浮かべた貴嶺は、手を胸の谷間に置いて言った。

「どこを、触って欲しいんです？」

頬にキスをされ、間近から綺麗な目に見つめられて、困ってしまう。

「ど、どこでも……い、いろいろ？」

「いろいろ？」

貴嶺が噴き出すように笑った。あまり表情の変わらない彼にしては珍しいことだけど、純奈はムツとして唇を失らせた。

「ああ、すみません」

笑みを浮かべたまま、貴嶺が謝ってくる。

「別に、謝って欲しかったわけじゃ、ないですけど……」

そう言うって横を向いた。すぐに頬に手を当てられ正面に顔を戻されると、チュツとキスされる。

「どこでも、いろいろ、触って、感じて、あなたの身体を好きにしてくださいですか？」

瞬きをして、その言葉を純奈なりに理解すると、一気に顔が熱くなってくる。

要するに、旦那様の綺麗な手や唇で身体を触られて、いろいろされちゃうということだ。純奈は、旦那様から、トロトロに蕩かされて、音を上げるまで愛されるのを想像して

真っ赤になる。

「その顔は、OK、ということですよね」

胸の谷間に置かれていた手が、純奈の乳房を優しく掴んだ。乳房を手のひら全体で揉み上げながら、先端を指で摘ままれると、腰もお腹も疼いた。

「この程度で、腰を揺らさないで。困ります」
揺らした覚えなんてない。そんな風に言われると、こっちの方が恥ずかしくて困ってしまう。

「も……や、やめる！ むり……っ」

そう言った直後、貴嶺の唇に純奈の胸がばくりと食べられた。

貴嶺は音を立てて乳房を吸った後、まるで見せつけるように胸の先端を舐めながら純奈を見上げる。その、なんともエロい視線に、息を詰めた。

彼は再び胸の先端を口に含むと、舌で転がし吸ってくる。

あまりの恥ずかしさに、思わず顔を背けた。

「……った、かね、さ……っ」

貴嶺は両方の乳房を唇で丹念に愛撫すると、大きな手で乳房を揉み、徐々に唇を下げていく。

この先を予感した純奈は、閉じた足にぎゅっと力を入れた。

足の付け根にキスをされたかと思うと、膝に手をかけられ、やや強引に開かれる。

「や……っ」

「閉じたら、愛せない」

貴嶺の目の前に、純奈の秘めた場所が晒されている。

すでに彼には、何度も見られているが、こればかりは本当に慣れない。とにかくもう、恥ずかしくて堪らないのだ。

「ソレ、やだ」

「それ？」

羞恥心で泣きそうになりながら、両手で貴嶺の顔をブロックする。

「あまり焦らすと、余計に、したくなる」

貴嶺は純奈の開いた足の間顔を埋めた。そしてなんの躊躇いもなく、ソコを舐めてくる。

「……っふあ」

鼻にかかった甘い声が出てしまい、恥ずかしさに唇を噛んだ。

すると貴嶺の唇が、敏感な尖った部分を吸い、円を描くように舌を動かす。その瞬間、純奈の身体がビクツと震えた。

「やっ……」

強すぎる刺激に、つい身をよじって逃れようとする。けれど貴嶺はそれを許さず、宥めるみたいに純奈の肌を撫でた。

そうして、彼は何度も隙間を舐め上げ、舌で中心を抉ってくる。そのたびに、純奈の口からは抑えきれない声が溢れた。

貴嶺の動きに合わせて濡らせて濡れた音が聞こえて、ソコが凄く潤っているのがわかる。純奈は身を震わせて、顔を覆った。

「も、いい、です」

しかし、純奈の声を無視して貴嶺の舌は動き続ける。それが純奈の中に入ってくるのを感じて、ビクンと腰が跳ねた。

「あんっ」

純奈は足の指先を丸めて、ゾクゾクした快感に身を反らした。

潤ったソコを何度も貴嶺の舌で攻め立てられ、純奈は息を詰めて腰を揺らす。

身体が疼いて堪らない。

恥ずかしくて、同じくらい気持ちよくて……おかしくなりそうだ。

「貴嶺さん、も、いい、です」

喘ぎながら言う。

「わかってます」

純奈の足の間から貴嶺が顔を上げて、唇を舐める。その仕草にすら心臓がドキドキした。

「そ、そんなところ、舐めないでくださいよう……」

純奈の言葉に、貴嶺は困った顔をして笑った。

「好きな人の身体を舐めるのは、男の性です」

きっぱりと言われて、でも、と思っただけ言う。

「だ、だって、恥ずかしい」

「煽らないで純奈。そろそろ、あなたに入れてもいいですか？」

言いながら、貴嶺の下半身が純奈に押しつけられた。はっきりと反応しているモノを感じて、純奈のお腹の奥が堪らなく疼く。

は、と吐き出される貴嶺の吐息が熱い。純奈は目を閉じて、貴嶺の背に手を回した。衣擦れの音がした後、隙間に先端が当てられて、ゆっくり中に入ってくる。質量を持った熱く大きなモノが、純奈の身体の中を満たしていった。

「っんう」

「ああ、狭いです」

貴嶺は純奈の中を満たして、そう言う。いつもと同じセリフだ。

「気持ち、いい、です？」

「堪らなく、イイです。あなたは？」

笑みを浮かべて、はあ、と零す息が悩ましい。

こんなに素敵な人が、純奈と身体を繋げて、そんなことを言うなんて。顔が赤くなるどころか、茹っってしまうそうだ。

思わず貴嶺に見惚れていると、彼は純奈の膝を抱えて腰を揺らし始める。

ギリギリまで腰を引いたかと思うと、グッと奥まで突き入れられた。

その動きが、だんだんと速くなってくる。

純奈の中の貴嶺が、最初より大きくなった気がした。

彼は純奈を揺さぶりながら、時折眉を寄せて、何かに耐えるような顔をする。けれど、彼の零す吐息や表情から、彼が純奈の身体で気持ちよくなっていると伝わってきた。

それを感じた瞬間、純奈の中がうねるみたいに反応する。

ガクガク震える身体で貴嶺にしがみついた。

「あ……っ、貴嶺さ……っ」

「ああ、イキそうですか？」

貴嶺が掠れた声でそう言うと、純奈を見つめてくる。貴嶺のこめかみから汗が流れ落ちた。いつもより体温が高い気がして、彼が感じているのがわかる。

「俺も、です。でも、あなたが先だ」

言った後、貴嶺の腰が強く押しつけられ、最奥を突かれた。奥は、純奈が一番弱いところ。

「あっ……あ、あ……」

そこで円を描くように腰を揺らされ、純奈の腰が反る。

こんな風に、純奈の中で感じることを教えたのは貴嶺だ。だからこそ、彼は純奈の弱いところをよく知っている。

「ダメ……っ」

「イって、純奈」

それを熱い息とともに耳元で言われた。貴嶺の低い美声に色っぽく囁かれたら、余計に感じてしまう。

純奈は、貴嶺に強く奥を突かれて、達してしまった。

「あ……っん」

その余韻に浸る間もなく、再び貴嶺に腰を揺すられるから堪らない。

「も、やだ……っ」

苦しくて、貴嶺に震える手を伸ばす。腰の横についている腕を掴んで、言った。

「まだ……っ？」

「ええ。乱れたあなたを、もっと見たい」

そう言って、貴嶺は激しく腰を打ちつけてくる。そんな風にされたら、敏感になった身体は、再び大きな快感の渦に吞まれてしまう。

「あ……っや……っ」

純奈は自分を突き上げる貴嶺に何度も揺さぶられ、短い間に、また達してしまった。しかし、貴嶺が上から押さえつけているため、純奈は身動きすることもできない。

「……っはー！」

次の瞬間、貴嶺が熱い息を吐いた。彼は腰を強く押し付け、そのまま何度か緩く腰を揺ると動きを止めた。

ベッドルームに、お互いの忙しい息づかいが響く。

もう指一本動かすのも億劫なほど疲れて、純奈はぱたりとベッドの上に両手を投げ出した。

目を開けると、肩を揺らして荒い息を繰り返す貴嶺が見える。

彼は髪をかき上げ、大きく息を吐く。純奈と目が合うと、口元に笑みを浮かべて、ゆっくりと覆いかぶさってきた。

貴嶺と繋がった部分が微かに疼く。だって、貴嶺の身体の重みは気持ちいいから。

その反応は貴嶺にも伝わってしまったようで、耳元でクスツと笑われた。

「しばらく休憩しないと、すぐには無理ですよ。あなたは」

そう言って、貴嶺が腰を軽く揺らす。

「……っんん」

「そうやって狭くして。いつも恥ずかしいと言う割に、あなたの身体は不謹慎ですね」

丁寧な言葉の中に、なんとも言えないエロい雰囲気を感じる。

貴嶺のほうが、ずっと不謹慎だ。

「俺は、我慢しないでもいいんでしょうか？」

そう言って、再び軽く腰を揺らされる。

貴嶺の表情は、そんなに変わらないのに、目が違う気がして。

「もう、ダメです」

純奈が言うのと、貴嶺は口元に笑みを浮かべて、一度深く息を吐いた。そして、ゆっくりと純奈の中から自身を抜く。その中を擦られる感覚がなんとも言えなくて、声を嘔み殺すので精いっぱい。

おまけに、中から何かがトロリと溢れる感覚に、羞恥心でどうにかなってしまいそうだ。真っ赤になつて貴嶺に背を向ける純奈を、彼はそつと抱きしめティッシュを手取る。そうして純奈は、今回も貴嶺にされるがまま、ソコを拭かれてしまったのだった。

2

「えっ、フランス、ですか？」

久しぶりに一緒に夕食を食べている最中、貴嶺が言いにくそうに切り出してきた。

ドイツでの新婚旅行が二日後という時だった。ようやくまとまった休みが取れた貴嶺と、延び延びになっていた新婚旅行。凄く楽しみにしていて、指折り教えていたのだが。

二日後、仕事でフランスへ行かなければならなくなった、と言われて目を丸くしてしまふ。

「すみません」

貴嶺が純奈に頭を下げた。

「あ……」

旦那様の仕事は外交官。現在はドイツ大使館に勤務しているが、仕事内容によっては他の国に行くこともあるだろう。

ここで、そんな仕事、どうして断ってくれないの、と言うのはわがままでわかっている。

でも……

シヨックを隠し切れずシュンとしていると、貴嶺が言葉を続けた。

「旅行先を、フランスに変更してもいいですか？」

「え？」

「上司が、仕事の後に、改めてまとまった休暇をくれるそうです……。もちろん、こちらに戻って、ドイツ旅行をやり直してもいいです」

フランス旅行かドイツ旅行……？

「そうしたら、純奈さんが楽しみにしていた、ノイシュヴァンシュタイン城にも行けます」

新婚旅行の予定を立てる時、何度も貴嶺に行きたいと言ったドイツのノイシュヴァンシュタイン城。だから、貴嶺の頭にもインプットされていたのだろう。

貴嶺はじつと純奈の答えを待っている。

純奈は、貴嶺の奥さんだ。たとえ思うところがあつたとしても、ここでわがままを言うべきではない。きつと貴嶺だつて、不本意だつたと思うから。

純奈はいろんな思いを呑み込んで、笑みを浮かべた。

「フランス旅行で、いいです」

「すみません」

貴嶺が再び頭を下げてきたので、純奈は慌あわてて首を振る。

「貴嶺さん、大丈夫です。私、フランスの名所とかよく知らないの……どこかおすすめ場所に入れて行ってください。貴嶺さんは以前、住んでたんですよね？ フランスに。ドイツには、まだしばらくいますし、またノイシュヴァンシュタイン城へ行く機会もありますから」

純奈の言葉に、貴嶺はため息をついて眼鏡を押し上げた。

「もちろん、いつでも行けます。けど……これは、絶対に破ってはいけない約束でした」
そう言つて、純奈を見つめる貴嶺は、すみません、ともう一度言う。

「もう、いいですよ」

「いえ、申し訳ないことを、さらにお願ひしないといけないので」

「え？」

「フランスでパーティーがあるんです。ドイツとフランス、そして日本の観光協会からなるもので、ブラックタイ着用のパーティーです」

首を傾げた。だつて、言っている意味がわからない。ブラックタイ着用のパーティーって何？

「ブラックタイと言うのは、いわゆるタキシードのことです。今回は黒の蝶ネクタイをつけた礼装での出席を指定されています」

純奈の疑問を感じ取ったのか、貴嶺が丁寧に説明してくれる。

「それで、私にお願いというのは？」

「俺と、同伴してください。今回の仕事は、パーティーに出席することです」

「……………ど、同伴？」

「はい」

同伴というのは、つまり貴嶺と一緒に純奈もパーティーに出るとのことだ。

「一緒にいるだけでいいんでしょうか？」

「はい。今後もパーティーの際には、ついてきてください」

今後も、と言われて、友人の松尾隆介の言葉を思い出す。

隆介は、中学時代から仲のいい友人だ。少し前、同窓会で久しぶりに会ったら、外務省職員になっていた。それも、貴嶺がドイツ赴任前にいた部署の同僚だったのだ。

その隆介が、雑談がてら「貴嶺ほどのエリート外交官ならきつとパーティーの出席率も高いだろう」と言っていたのだ。

外国のパーティーでは、妻帯者は必ず妻を同伴するらしい。

純奈は、ついにきたか、と思った。

「わかりました」

事前に聞いていたこともあって、純奈は素直に頷いた。すると貴嶺にジッと見つめられる。

「なんですか？」

「いえ。無理を言つてすみません。純奈さんのドレスは、向こうで用意しましょう。フランスには、桐瑚と、大使夫人が同行します」

桐瑚というのは、貴嶺の大学時代からの親友で、同期でもある仲野桐瑚のことだ。

彼はともかく……

「大使、夫人？」

「ええ。永野ドイツ大使の奥様です。それからもう一つ、言っておきます」

なんだろう、と思ひながら、純奈は食事の手を止めて貴嶺を見る。

「今回の仕事は、いわば接待のようなものです。パーティーに参加するのは、日本やフランス、ドイツの有名俳優たちで、映画を通した国際交流の場と考えてください」
 「どうして接待をするんですか？」

外交官が、俳優さんたちを接待するというのに疑問を持つ。

「外交官は、対日理解促進のために様々な外交活動をしています。今回のような接待もその一環になります」

貴嶺の説明に、そういうものなんだ、と納得する。

すると貴嶺が、一度下を向いてから、まっすぐ純奈に視線を合わせてきた。

「パーティーの参加者の中に、女優の秋元亜矢がいます。ご存じですか？」

その名前を聞いて、純奈の心臓が、ドキン、と跳ね上がった。

「……はい、知っています。美人女優で有名な方、ですよね」

それに、彼女は貴嶺の元カノだと聞いたことがあった。以前、隆介がそう言っていたから。

「彼女は以前、フランス大使館の一部を映画撮影に使ったことがあります。今回はそのお礼と、次回作で予定しているドイツ撮影について、こちらの関係者との繋ぎを頼まれています。だから、通訳を兼ねて彼女と一緒にいる機会が多くなるでしょう。その時は、大使夫人と桐瑚と一緒にいてください」

純奈は瞬きをして、ただ貴嶺を見つめた。

今、こうして話をしたのは、きっと貴嶺なりの誠意だろうと思う。

いつもと同じ無表情ではあるが、どこか申し訳なさそうにも見える。

「すみません、純奈さん」

「……私と一緒に行く必要って、ありますか？」

さっきまでは、奥さんなのだから、パーティーにはついて行くものだと思っていた。でも、秋元亜矢と一緒にいる機会が多くなる、と聞いては我慢できなくて……

だって、彼女は貴嶺の元カノだ。それを知っている純奈としては、ちょっと、いや、かなりモヤモヤしてしまう。

「私は、いない方が、よくないですか？」

「……そんなことは、ないです」

今、返事が少し遅れた、と思いつながら、純奈は言葉が続ける。

「あるでしょうか？ 秋元亜矢さんを接待するのだったら、私はついて行かない方が上手くいくと思います。ついでに、結婚指輪もしないで出席したらどうですか？」

「……俺は、仕事で一緒にいるだけです。それに、結婚指輪をしないで、というのは意味がわかりません」

わかってるくせに、わからないとか言わないでほしい。純奈はイライラしてきた。

「私、家でお留守番してます。新婚旅行も、行かなくていいです」
 夕食は半分程度食べた。だけど、すっかり食べる気が失せてしまった。
 貴嶺を見た純奈は、もう一度言う。
 「フランスには行きたくありません。私が話せるのは日本語だけだし、行っても役に立ちませんから」

言い切って、はあ、と息を吐いた。

旅行は行かない、フランスへも行かない。

自分がわがままを言っているとわかっているが、どうしても無理だった。

だいたい、なんで秋元亜矢がここで出てくるんだらう。これ以上、貴嶺の口からその名前を聞きたくなかった。

「それはだめです。純奈さんは俺の妻です。夫婦として招待を受けているので、一緒に来てください」

「体調不良、つてことでいいじゃないですか」

「あなたの分も、フライトチケットを取ってあります。ホテルも二名で予約しています」

「じゃあ、キャンセルしてください」

「できません。仕事ですから」

そう、きっぱり言い切る貴嶺は、いつもとちよつと違った。普段は、たいてい純奈の

希望を聞き入れてくれるのに。

「仕事って言うけど、どうしてその役目が桐瑚さんじゃいけないんですか？ それつてつまり、貴嶺さんが以前、秋元亜矢さんの彼女だったからでしょう？」

純奈が思い余つて秋元亜矢との関係を口に出す。けれど、貴嶺はまるで表情を変えなかった。

「桐瑚には、別の仕事があります。それに、彼女とは話さなければならぬことがあるんです」

純奈が彼女だったからでしょう？ と言ったのに、貴嶺はそれに触れなかった。触れたくないのかもしれない。言い訳にしか聞こえないけれど、仕事のことを深く聞くのは、はばかられる。

純奈は下唇を噛んで下を向いた。

「行きたく、ないです」

そう言うと、テーブルの上に置いていた純奈の手を、貴嶺の大きな手が包んだ。その手を外そうとすると、それを阻むように強く掴まれた。

「あなたが怒るのはもつともです。申し訳ないと思っっています。でも、お願いです」
 貴嶺は、掴んでいる純奈の手の甲を、親指で撫でた。

「俺の仕事を、支えてください、純奈」

ここに来て名前を呼ぶとは、この人はなんてズルいんだろう。だけど、支えてくださいと言われて、嫌だとは言えない。

「手、離してください……わかりました」

貴嶺を支えるのは、妻である純奈の役目だと思うから。

食べたくなかったご飯を見ながら、純奈はテーブルの下で手を握りしめた。

☆ ★ ☆

あつという間に二日後になってしまった。

朝早くに家を出て、純奈はテンション最低のまま飛行機に乗る。

あれから純奈は、貴嶺とはほぼ口をきいていない。一緒にいながら、こんなにも口をきかないのは初めてだった。

隣には貴嶺が座っているが、純奈は何か話しかけられても一言返すだけ。なんだかもう、引つ込みがつかなくなってきた。

思い返せば、本当にもう大人げない二日間だった。

貴嶺は仕事だと言っているのだから、信じればいいのだ。貴嶺の奥さんは純奈なのだ。し、誰はばかることもない。大体、貴嶺は純奈を別に蔑ろにしたわけじゃないのだ。

それなのに、口をきかないだなんて、我ながらなんて子供っぽいんだろう。

そんな自分に、自己嫌悪を抱く。

貴嶺は純奈のことを好きだと言って、結婚してほしいとまで言ってくれた人なのに。そう思いながらため息をつくとき、通路側に座っていた貴嶺が、席を立てて移動する。たぶんトイレだろう。

純奈が貴嶺のいない隣の席を見ていると、スーツ姿の桐瑚がそこに座った。

「ちよつといい？」

純奈は頷いて桐瑚を見上げる。彼は、端正な中にもちよつと崩れたワイルドさのあるイケメンだ。貴嶺と同じくスーツがよく似合っている。

「じゃお、下手打ったかなあって。本当に仕事なんだよ。許してあげて」

「……わかっています。だから、ここにいますよ」

彼は貴嶺と純奈の雰囲気がよくないのを察して、様子を見に来たのだろう。

「でも納得いかない？」

凶星をさされて下を向くと、桐瑚がそつと頭を撫でてきた。

「うん。納得いかないよなあ。ごめんね。貴嶺も、いい気分でこの仕事を引き受けたわけじゃないんだ。なんで奥さん同伴なのに、全然関係ない女のご機嫌取りしなきゃいけないんだって、心から思ってるよ」

これは、真面目な話なのかもしれない。だって、桐瑚が貴嶺のことを、いつもの「じゃお」じゃなく、貴嶺と言っているから。

「貴嶺は、今回の仕事、不本意だったと思う。新婚旅行までキャンセルしてさ。ただ貴嶺は、真面目に仕事を引き受けただけなんだ。俺が、無理に頼んでしまったからね。申し訳ない」

桐瑚はそう言って、純奈に向かって頭を下げた。

「そんな、頭を上げてください。……大丈夫ですから」

純奈が慌てて言うのと、桐瑚は頭を上げて優しく微笑んだ。

「貴嶺は、結婚して嬉しそうだったよ」

「嬉しそう？」

「そうだよ。君と結婚できて、貴嶺は幸せそうだ……っと、お帰り、じゃお」

その時、ちょうど貴嶺が戻って来た。眼鏡のブリッジを押し上げ、桐瑚を見下ろす。

「何してる？」

「純奈ちゃんと、ラブトーク」

桐瑚はそう言って席から立ち上がった。桐瑚の席は、ここから少し離れたところにある。大使夫人と一緒にいる。

「じゃね、純奈ちゃん」

手を振られたので、振り返す。貴嶺はその様子を見つつ、何も言わずに純奈の隣に座った。

「何を話していたんですか？」

「……別に」

そう言って視線を下に向けると、窓側に座っている純奈の目に、貴嶺の左手が見えた。ダイヤが一粒だけついた、結婚指輪。

けれど、純奈の左手薬指に結婚指輪は嵌まっていない。もちろん、婚約指輪も。

貴嶺に貰った指輪は、どちらもビックリするほど高価なものだった。そのため、指に嵌めるのを躊躇ってしまった。もし、ダイヤが取れてしまったら、傷ついてしまったら、指紋が付いたら……と、気になってしまったのだ。

今回は夫婦での招待ということだったので、持ってきてはいるけど、箱にしまったまままだ。

「まだ、怒ってますか？」

じっと貴嶺の左手を見ていたら、ふいに声をかけられた。

「……そうですね」

目線を合わせず、純奈は言った。

「すみません。旦那様の仕事に、文句を言うなんてダメだってわかっています。私が、上

手く割り切れてないだけなんです」

言った後、後悔した。

さつき桐瑚に言われた、結婚して貴嶺は嬉しそうだった、という言葉を思い出し、まったから。

「仕事の内容を、どうして聞かないんです？」

淡々とそう言われて、貴嶺を見上げた。でも、何も言えなくて目を伏せる。すると貴嶺に顎を掴まれて、強引に上を向かされた。

「今回の俺の仕事は、秋元さんに大使館での撮影を控えるように言うことです。そして、彼女に外務省へ顔が利くと勘違いさせないようにするのが真の目的です。彼女は、外務省高官の姪で、前回の撮影の際には、彼女が、というより、彼女の叔父が勝手に動いていました。ですが、それを当たり前に受け取られては困るのです」

そんなことを、私が聞いてしまったのだろうか。

ただ、その仕事内容を聞く限り、彼女と個人的に繋がりのあった貴嶺が話した方が、変に角を立てずに取められると思われたのかもしれない。それでも……

「やっぱり、貴嶺さんが秋元亜矢さんの元カレだから、指名されたんでしょう？」

「ええ。否定はしません」

今回はさっぱりと肯定されて、純奈は顔を逸らす。そうすることで、顎を掴んでいた

手も離れた。

「もともと、彼女が外務省高官の姪というのもあり、主役に抜擢された映画です。実力はもちろんですが、コネクションも必要ですから。ただ、映画撮影に外務省職員が個人的な理由で大使館に融通を利かせた……などとマスコミに叩かれたら大変です」

純奈が貴嶺を見上げて瞬きをする。彼は、そつと純奈の髪の毛に触れてきた。

「内緒ですよ」

唇に人差し指を当て、口元に笑みを浮かべる。

「それ……私に話してしまって、よかったですか？」

「いいえ。だから、聞かなかったことにしてください」

「だったら、どうして話すんですか？」

純奈が眉を寄せて尋ねる。すると貴嶺は、眼鏡を押し上げ、目を伏せた。

「純奈さんは、俺の妻なので」

貴嶺はそう言うと、純奈の右手に触れた。そして、結婚指輪をしている彼の左の薬指が、純奈の指に絡まる。

「仕事について全部話したわけではありませんが、大まかに言うとそういう理由です。どうしても、秋元さんと話す時間が多くなりますが、許してください」

純奈を見る貴嶺の表情はいつもと同じ。

でも、繋いでいる手から、彼が緊張しているのが伝わってきた。手に、少し汗をかいている。

「たとえ仕事でも、貴嶺さんが元カノに近づくなんて、本当は凄く嫌です」

出会ってたった四ヶ月の純奈が、もうすでに嫉妬と独占欲を覚えつつある。この前まで、こんな感情、知らなかったのに。

「ごめんなさい、貴嶺さん」

「いえ」

純奈は、貴嶺を上目づかいで見つめて、絡んでいる指を握り返す。結婚指輪の感触を確かめるように、自分の薬指を少し動かすと、繋いだ手を引っ張られた。

そして貴嶺の唇が、純奈のそれに近づく。

触れ合う直前に純奈は顔を逸らした。

「ひ、飛行機の中です」

隣の人に見られたら、と思つて目を泳がせる。

「みんな、寝てます」

言われて、通路を挟んだ隣の席を見ると、茶色の髪の毛をした男の人は、アイマスクをして寝ていた。その隣の女性も目を閉じている。後ろを見れば、斜め後方の人も目を閉じているように見えた。

貴嶺は繋いだ純奈の手を持ち上げ、その手の甲にキスをしつつこちらに視線を向ける。彼のこういうところは、本当に日本人っぽくない。そう思いながら、純奈は赤くなつて見つめ返す。

すると、貴嶺がおもむろに手の甲の骨に軽く歯を立ててきた。途端に、純奈の心臓が跳ねた。まるでセックスをしている時に感じるみたいなの、ゾクリと痺れる感覚に堪らなくなる。

貴嶺は純奈の手を離すと、そのまま純奈の肩を抱き寄せた。

「あ……」

小さく声を上げて、貴嶺を見上げる。こうして見上げられるのが好きだと以前言われたのを思い出し、純奈はそっと目を閉じた。

次の瞬間、柔らかい唇が、純奈の唇に重ねられる。啄むように何度も唇が重ねられた。そのうち、唇の隙間から貴嶺の舌が入ってきて、互いの舌を絡め合う。

「ん……っふ」

堪えられず、鼻にかかった息が漏れてしまった。貴嶺は唇を離し、純奈の頭を抱き込むみたいにして耳元で囁いてくる。

「声は、抑えてください」

顔が熱くなつて、貴嶺を見上げると、唇に触れるか触れないかの距離で、小さな声で

言われる。

「仲直り、してくれますか」

「は、はい」

純奈も声を小さくして言うと、唇のすぐ近くで貴嶺が微笑む。その表情に、堪らなくドキドキして、身体が変になりそうだった。

「あなたが好きなんです。仕事でなかったら、絶対に引き受けたりしない」

さらに身体を引き寄せられ、座席越しに強く抱きしめられた。

「俺には、あなただけなのに……」

最上の告白に聞こえた。純奈の心臓は先程から激しく鳴りっぱなしだ。こんなことを、貴嶺みたいな素敵な人に言ってもらえるなんて……

仕事に対するモヤモヤはまだ残っているけれど、貴嶺のこの告白を聞いてしまったら、純奈は許してしまう。

「も、もういいです……」

純奈が言うと、さらに強く抱きしめられて、息が詰まりそうだった。

「今日の仕事が終わったら、ドレス脱がせてくださいね。……もう、一週間以上、あなたに触れてません」

唇の上あたりで、そんな色っぽく囁かないで欲しい。しかも、こんな公共の場所でエ

ロい誘いをしてくるなんて。

もうっ、と思いつながら言葉返す。

「け、結婚してから、一度も一緒にお酒、飲んだことないです。だから、その後なら……」

こんなこと言うなんて、本当に純奈は変わったと思う。

ドキドキしつつ、間近にある貴嶺の綺麗な目を見つめた。

唇の端に笑みを浮かべ、さらに身を寄せた貴嶺は、純奈の唇の上で言う。

「お安いご用です」

そうして軽くキスをして微笑んだ。

「酔ったら少し、しつこくなるかもしれませんが」

そう言って、再び純奈の唇にキスをして、隙間から舌を入れてくる。

深いキスをしながら、声を抑えるのに必死だった。

こんな場所で、物語のような情熱的なキスをしている。

感じすぎて、声が我慢できなくなりそう。だから貴嶺の胸を押してキスを止める。

「もう、ダメですっ」

息を切らしてそう言うと、貴嶺の長い指が純奈の濡れた唇を拭いた。

「続きは、今夜のベッドでいいですか？」

そんなことをさらっと言われて、純奈の心臓は爆発寸前。